

教育心理学に関わる研究成果の活用(6)

The Utilizing of Research Findings on Educational Psychology (6)

高 賢 一 (人間科学部こども学科教授)

Kenichi TAKA (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

大学の教職課程科目である「教育心理学」を担当しているが、学習理論、動機づけ理論、学級集団理論、発達理論、特別支援教育、学校カウンセリングなど、学校現場の教育活動と関連が深い知見が多い。こうした知見をいかにわかりやすく学生に伝えるか、それをいかに日々の教育活動に活かしてもらうことができるか模索している。今日の学校現場では、とりわけ子どもたちの学習意欲や生活意欲をいかに高めることができるか、いかに子どもたちの発達や自立を促すための効果的な支援を行うことができるか、それが大きな課題となっている。

こうした課題に応えるためにも、教育心理学の知見、例えば、発達理論、学習理論、動機づけ、記憶、知能、パーソナリティ、学級集団、教育評価、心の問題と発達障害、学校カウンセリングなどの知見を活用する意義は大きいと思われる。本稿では、前回の第12巻第1号での投稿に引き続き、学校現場に活用できる教育心理学に関する研究成果の発掘と活用を模索する。

〈キーワード〉

慰め、励まし、情緒的サポート、「母性愛」信奉傾向、夫婦関係、家族システム

I 問題と目的

大学の教職課程において「教育心理学」を担当しているが、教育心理学の知見をいかに学生に分かりやすく伝えるか、またそれをいかに学校の教育活動に活かしてもらえるか模索している。残念ながら、こうした研究成果があまり還元されていないのが実情である。本稿では、日本教育心理学会が発刊している学会誌の『教育心理学研究』を精査し、日々の教育活動に活かせるような研究成果の発掘と活用を試みる。

この学会誌の内容は、概ね原著と実践研究に大別できるが、本稿では主として実践研究の部分を中心に精査し、教師に関する研究も取り上げながら、その知見(研究成果)を教育実践活動に活かすことができるか検討することにした。なお、ここで取り上げた研究の目的や方法、成果や課題については、研究報告の一部を要約・引用している。

今回は、二つの研究報告・成果について検討し、学校現場で活用できる方法を模索する。1つ目は中・高校生、2つ目は大学生を調査対象にした研究である。

II 教育実践活動に結びつく知見(研究成果)

II-1 「青年期における親密な友人への効果的な慰め」 ーテストの失敗場面に着目してー

1. 問題と目的

青年期では、友人へのさまざまな欲求や感情が発達に伴って変化している。しかし、それらの欲求や感情がどのように関連して慰められた時の評価や感情に影響を与えるのか十分に検討されていない。小川⁽¹⁾は、これまでの知見を踏まえて、中学生、高校生、大学生を対象に、学業での失敗場面における友人のより良い慰め方を検討するため、二つの目的を設定して検討を行っている。

第1に、友人への欲求が慰めの受け手に生じる評価を媒介にして、感情に影響する全般的な影響過程を探索的に検討する。第2に、「言語的慰め」および「非言語的な慰め」という慰め行動と、「何もせずそっと離れる」という行動の三つについて、それらの行動を受けた時の感情の違いについて、以下の仮説に基づいて検討する。

仮説1 慰められた時のポジティブ感情(感謝)は、「言

語的慰め」と「非言語的慰め」が「何もせずそっと離れる」よりも高い。これは、青年が親しい友人に情緒的サポートを期待しているので、慰めを受けた時にポジティブ感情が高くなると考えられる。

仮説2 慰められた時のネガティブ感情（自責と反発）は、「何もせずそっと離れる」が最も高く、「言語的慰め」、「非言語的慰め」の順に低くなる。親しい友人からサポートが得られない時に心理的不満が生じることから、学業の失敗場面でも、友人が何もせずに離れた場合は慰めを受けた場合よりもネガティブ感情が高くなるだろう。また、非言語的慰めは言語的慰めよりサポートの明瞭性が低いため、脅威を感じにくく、ネガティブ感情が低くなるだろう。

仮説3 学校段階（中学生、高校生、大学生）によって慰められた時の感情に違いが生じる。具体的には、学校段階が進むにつれて、言語的・非言語的慰めを受けた場合は、ポジティブ感情が低くネガティブ感情が高くなり、何もせずそっと離れた場合は、ポジティブ感情が低くネガティブ感情が低くなるだろう。本研究では、友人への欲求が評価を媒介して感情へと影響する過程を踏まえて、学校段階による感情の違いを考察していく。

2. 方法

2014年5月から2014年7月にかけて、東海地方の公立中学1校の中学2年生191名、東海地方の公立高校1校の高校2年生331名、首都圏の国立大学1校の1・2年生260名に質問紙調査を実施した。そのうち、回答に不備があるものや全て同じ番号に回答しているものなどを除外した。有効回答数640名を分析対象とした。

中学生と高校生にはクラス担任の教諭が説明を行い、大学生には著者が説明を行った。中学生と高校生はホームルームの時間に回答を求め、大学生は授業時間の一部を用いて回答を求めた。調査協力者には、同じ学校にいる親しい同性の友人1名（以下友人A）を思い浮かべてもらい、テストで不合格になり、友人Aから慰められる話を読んでもらった。

なお、受験やテストでの失敗場面では、慰めをする友人の立場によって慰めの受け手に与える影響が異なる可能性が示唆されている。そのため、調査協力者を友人Aが同じテストで合格した話を読む群（合格群）と友人Aもテストで不合格だった話を読む群（不合格群）へランダムに群分けをして回答を求めた。合格群は中学生77名、高校生139名、大学生129であり、不合格群は中学生74名、高校生131名、大学生90名であった。

調査協力者には、話の中で友人Aから慰められた場面を想像してもらった。友人Aの慰め方は、言語的慰めとして「励ましの言葉かけ」（以下励まし）、非言語的慰めとし

て「そっとそばに寄り添う」（以下寄り添う）、さらに友人が慰めをしない場合として「何もせずそっと離れる」（以下離れる）を設定し、調査協力者には3種類をすべて想像してもらった。

出来事的重要性と統制可能性の項目、友人への欲求項目や評価項目は、「とても思う」（6点）、「わりと思う」（5点）、「どちらかといえば思う」（4点）、「どちらかといえば思わない」（3点）、「あまり思わない」（2点）、「まったく思わない」（1点）の6件法で評定を求めた。感情項目は、上記6件法の「思う／思わない」の語句を「感じる／感じない」に替えて評定を求めた。

3. 結果と考察

本研究は、三つの慰め方別に、友人への欲求が評価を媒介して感情へと影響する全般的なプロセスをパス解析によって検討している。感情得点の共分散分析の結果、慰め方の主効果において、感謝は「励まし」と「寄り添う」が「離れる」より高くなり、仮説1が支持された。全体的な傾向として、テストで失敗して落ち込んで友人に対して励ましや寄り添うといった慰めをする方が、何もせずに離れるより、受け手にとってはポジティブな影響を与えと考えられる。

次に、反発は「励まし」と「離れる」が「寄り添う」より高くなったが、「励まし」と「離れる」に差がみられず、仮説2は一部支持された。以上より、学業の失敗場面で親しい友人が慰めをする場合、何も言わずにそばに寄り添うだけでも、受け手にポジティブな影響を与え、さらにネガティブな影響を最小限に抑えられる可能性が示唆された。

さらに、慰め方×学校段階の交互作用において、「励まし」と「寄り添う」では学校段階が進むにつれて感謝が低く自責が高くなったため、反発を除いて仮説3は支持された。また、「離れる」では学校段階が進むにつれて感謝が高く、反発が低くなったため、自責を除いて仮説3は支持された。

「励まし」と「寄り添う」の結果の共通点としては、どちらも心理的サポート希求からの慰めの意図、および有効性に正のパスがみられた。そして、慰めの意図から感謝へ正のパス、反発へ負のパスがみられ、有効性から感謝へ正のパスがみられた。この結果は、人間関係のトラブル場面での慰めを検討した小川（2014）と一致した。

「励まし」と「寄り添う」の相違点としては、有効性から自責と反発への負のパスが「励まし」でみられ、「寄り添う」ではみられなかった。さらに、「励まし」では、脅威から反発への正のパスもみられた。この原因として、本研究で用いた出来事の統制の可能性が高かったことが考えられる。本来、慰めは統制の可能性が低いネガティブな出来事に直面した相手に行われることが多い。

本研究では、テストの失敗で落ち込んでいる友人がいた場合、何もできなくてもそばに寄り添うことが効果的な慰め方であることが明らかになった。また、中学生は高校生や大学生よりも閉鎖的関係希求が高く、相互尊重欲求が低いため、落ち込んでいる時にそばを離れる友人に対して反発が高くなることが明らかになった。そのため、特に中学生において友人へのより良い慰めに関する教育的支援が必要だと考えられ、本研究の知見はどのような教育的支援が必要かを考える際の一助になると考えられる。

Ⅱ-2 「母性愛信奉傾向が夫婦関係と養育態度に与える影響—父親と母親の母性愛信奉傾向の交互作用に着目して—」

1. 問題と目的

江上⁽²⁾は、幼児を持つ夫婦304組（合計608名）を対象にして、父親と母親の母性愛信奉傾向が両者の抱く夫婦関係満足度と養育態度へ与える影響について、家族システムの観点から検証している。近年、女性の就労や父親の育児への関与の増加や文化の多様化に直面している。こうした状況の中で、父親が主たる養育者である母親のサポート役という位置づけから、養育の重要な担い手であるという報告や主張が増加しつつある。実際に、自分の子どもと多くの時間を一緒に過ごしたいという希望を持っている父親も一定数見られる。

しかし現実には、日本の養育者の子どもと接する時間は、母親が7.6時間であるのに対して父親は3.1時間程度（内閣府、2007）であり、未だ圧倒的に子育ては母親の手によって担われていると言わざるを得ない。国内のみならず海外においても、父親よりも母親の方が子どもと多くの時間を過ごしているという現実が指摘されている。子育て・育児に関わる研究でも、父親を対象とするものも微増傾向にあるものの、父親という存在に焦点化した研究が未だに少ないままである。

2. 方法

2歳から6歳までの子どもをもつ夫婦304組（父親304名、母親304名）が対象。2009年6月から2011年3月にかけて、北海道と福岡県の幼稚園と保育園の合計7園に調査への協力を依頼し、園ごとに質問紙を配布回収した。質問紙には回答は強制ではないこと、無記名であることを明記した。821組に配布し、父親は310名、母親は695名回収したが、その中で夫婦揃ったデータ304部（組）のみを本論文における分析対象とした。

結果の対象者に基本属性にあるようなフェイスシート項目の他に、下記のような調査項目を用いた。①「母性愛」信奉傾向尺度（江上、2005、2007）：13項目、5段階評定。

②夫婦関係円満尺度（諸井、1996）：6項目、5段階評定。
③親の養育態度尺度（中道・中澤、2003）：22項目、5段階評定。

本研究では、次のようなプロセスを検証する。①父親と母親の「母性愛」信奉傾向とそれらの交互作用は、両者が抱いている夫婦関係満足度にそれぞれ影響を与える。②父親と母親の「母性愛」信奉傾向とそれらの交互作用ならびに両者が抱いている夫婦関係満足度は父親母親双方の養育態度にそれぞれ作用する。

これらの検証を行うためには、まずは父母の「母性愛」信奉傾向とそれぞれが単独で夫婦関係満足度ならびに養育態度に作用するモデルを想定し、次に父母の「母性愛」信奉傾向の交互作用を含んだモデルを設定することとする。これは、父親と母親双方の夫婦関係満足度および養育態度に父親の「母性愛」信奉傾向と母親の「母性愛」信奉傾向のそれぞれが単独で作用するのか、それらの交互作用効果があらわれるのか検討するためである。

3. 結果と考察

本研究の結果から、父親における「母性愛」信奉傾向と夫婦関係満足度、養育態度との影響過程と母親におけるそれらは異なるということが明らかになった。養育態度のみならず、夫婦関係満足度にも作用するという点からも、父親・母親双方の「母性愛」信奉傾向の影響力は、とくに母親において強いということが証明された。

母親の「母性愛」信奉傾向は、父親の夫婦関係満足度や養育態度に作用しないが、父親の「母性愛」信奉傾向は、母親の夫婦関係満足度や養育態度に少なからず影響を及ぼす。さらに母親にとって、父親の「母性愛」信奉傾向は、母親自身の「母性愛」信奉傾向の高低によって捉え方が異なることも考察できた。父親と母親の微妙な違いを感じ取れる。

本研究により、「母性愛」信奉傾向が夫婦関係における満足度や子どもとのかかわりに寄与することが確認できたが、問題とされるのは母親自身の「母性愛」信奉傾向だけでなく、父親の「母性愛」信奉傾向も重要な要素であり、家族関係において議論されるべきであるということがわかった。これは、従来のように母子関係に閉じた研究の危険性を問い直すとともに家族システム論の考え方（亀口、1992）とも一致し、興味深いものといえる。

一方で、母親の「母性愛」信奉傾向が父親の認知する夫婦関係満足度や父親の養育態度に影響をなさなかった点は、先行研究や家族システム論の観点とは異なるものとなった。本研究では、「母性愛」信奉傾向という、女性・母親や母子関係に関わる信念を扱っていることから、夫婦サブシステムにおいて対称的な影響過程を共有しているわけではなく、「父親から母親へ」という影響が大きく出たも

のと思われる。もう一つの可能性としては、我が国の父親は、母親が自分の母親役割や子どもとの関わりにおいてどのような信念を抱いているかということについて、無関心・無頓着であるという姿勢の表れなのかもしれない。

本研究では、母親のみならず、父親の「母性愛」信奉傾向や夫婦関係満足度、養育態度も取り上げたことには一定の意義があると考えられる。しかし、母親と父親のそのような養育態度が、どのように作用し合って子どもの発達に影響するのかという点では検討できていない。家族システム論の重要性はすでに指摘されているが、父親と母親の「母性愛」信奉傾向が、夫婦関係や養育態度を通して子どもの発達にどのように寄与するのか、あるいは子どもの問題行動と何らかの関連があるのか、などの検討も行う必要がある。

Ⅲ 総合考察

Ⅱ-1では、中学生、高校生、大学生を対象にした質問紙調査により、親密な友人間で生じるテスト失敗場面での効果的な慰めを明らかにしている。調査対象者には、親しい友人からの言語的慰め（励ましの言葉かけ）、非言語的慰め（そばに寄り添う）、何もせず離れる行動（離れる）を受けた時の感情を評定してもらった。

その結果、言語的・非言語的慰めを受けた時は、自責や反発が最も低くなった。さらに、中学生は高校生や大学生より親密な友人とだけ一緒にいたいという閉鎖的關係希求が高く、互いの考えを尊重したいという相互尊重欲求が低い。ため、そばを離れる友人に対する反発が高くなった。したがって、テストの失敗で落ち込んだ友人には、何もできなくてもそばに寄り添うことが効果的な慰めであることが示唆された。

中学生、高校生、大学生になるにつれて、友人への欲求が段階的に変化していくことが明らかとなった。特に、「心理的サポート希求」と「閉鎖的關係希求」は中学生で高く、高校生、大学生になるにつれて低くなり、効果量も大きかった。中学生は、主なサポート源がこれまでの親から友人へと移行する時期であり、安心してサポートが得られる親密な友人関係の構築ができるように模索している段階だと考えられる。そのため、中学生では、友人から慰められる経験を重ねることで、友人への安定した信頼感を獲得して友人関係を深めていくことが重要であると考えられる。

ただ、友人から慰められる経験というのは、こちらから友人に慰めてほしいとわざわざおねだりをする 것도容易ではなく、実際にはそのような気の利く友人を探しておく必要がある。慰めてくれるかどうかは分からないが、テストで失敗した時に落ち込んでいることを友人に伝えることが肝要かと思われる。それで、慰めの言葉が出てきたり、

そばに寄り添ってもらえたりしたら上々といえよう。ただし、何もせず離れる行動をとったとしても、決して落ち込まない覚悟が必要であろう。

Ⅱ-2では、幼児を持つ夫婦304組を対象にして、父親と母親の「母性愛」信奉傾向が両者の抱く夫婦関係満足度と養育態度へ与える影響を家族システムの観点から検証されている。分析の結果、父親の場合、自身と母親の「母性愛」信奉傾向は夫婦関係満足度に影響しないが、母親の場合は、父親と自身の「母性愛」信奉傾向の交互作用効果が見られ、夫婦双方の「母性愛」信奉傾向が低い場合に夫婦関係満足度が低いことがわかった。

養育態度については、父親の場合、夫婦関係満足度が高いと子どもへの応答性も統制も強くなり、積極的に子どもと関わる姿勢が見られるということ、自身の「母性愛」信奉傾向が二つの養育態度に異なる作用の仕方をしているということが認められた。母親の場合には、父親と自身の「母性愛」信奉傾向の交互作用効果が認められ、夫婦双方の「母性愛」信奉傾向が高い場合に応答的な養育態度が高く、父親の「母性愛」信奉傾向が高く、母親の「母性愛」信奉傾向が低い場合に応答性は低かった。

江上（2005, 2007）は、「母性愛」信奉傾向にかかわる研究において、母親の「母性愛」信奉傾向は「両刃の剣」であるという解釈を行っている。これについては、本研究でもそのような解釈が成り立つと言えよう。すなわち、母親の「母性愛」信奉傾向は、夫婦関係の満足度や子どもへの積極的なかわりを促す一方で、パートナーである父親の「母性愛」信奉傾向の高低によってはプラスの作用を持たない、さらには反対の働きさえ見せる場合もある。

本研究で初めて取り上げた父親の「母性愛」信奉傾向についても、父親の育児における応答性を高めるとともに統制を低下させているという正負の側面を含んでいる。加えて、母親にとってプレッシャーや反感の要素になり得る一方で、「母性愛」信奉傾向の高い母親のもとでは子育ての動機づけを高めている面も否めない。

子育て支援を行う上で、夫婦双方の「母性愛」信奉傾向が低い場合に夫婦関係満足度が低いこと、夫婦双方の「母性愛」信奉傾向が高い場合は、応答的な養育態度が高く、父親の「母性愛」信奉傾向が高く、母親の「母性愛」信奉傾向が低い場合は、応答的な養育態度が低いことなどは大いに参考になる知見といえよう。

【註】

- (1) 日本教育心理学会編『教育心理学研究第66巻第2号』, 2018, pp.136-149.
- (2) 日本教育心理学会編『教育心理学研究第61巻第2号』, 2013, pp.169-180.